

人でなしの恋

江戸川乱歩

青空文庫

かどの 門野、御存知ごぞんじでいらつしやいましょう。十年以前になくなつた先せんの夫なのでございます。こんなに月日がたちますと、門野と口に出していつて見ましても、一いつこう向他人様ひとさまの様ようで、あの出来事にしましても、何だかこう、夢ではなかつたかしら、なんて思われるほどでございます。門野家へ私がお嫁入りをしましたのは、どうした御縁からでございますかしたら、申すまでもなく、お嫁入り前に、お互たがいに好き合っていたなんて、そんなみだらなのではなく、仲人なこうどが母を説ときつけて、母が又私に申し聞かせて、それを、

おぼこ娘の私は、どう否いなやが申せましょう。おきまりでございませわ。畳にのの字を書きながら、ついうなずいてしまったのでございませ。

でも、あの人が私の夫になる方かと思ひますと、狭い町のこと
で、それに先方も相当の家柄なものですから、顔位は見知つて
ましたけれど、噂うわさによれば、何となく氣むずかしい方の様だがと
か、あんな綺麗きれいな方のことだから、ええ、御承知かも知れませ
が、門野というのは、それはそれは、凄すごい様な美男子で、いいえ、
おのろけではございませぬ。美しいといひます中うちにも、病身なせ
いもあつたのでございませう、どこやら陰氣で、青白く、透き
通る様な、ですから、一層水際立つた殿御とのごぶりだったのでござい

ますが、それが、ただ美しい以上に、何かこう凄い感じを与えたのでございます。その様に綺麗な方のことですから、きつと外ほかに美しい娘さんもおありでしょうし、もしそうでないとしましても、私の様なこのお多福たふくが、どうまあ一生可愛がつて貰もらえよう、などと色々取とり越こし苦勞もしますれば、従つてお友達だとか、召使などの、その方かたの噂話にも聞き耳を立てるといった調子なのでございます。

そんな風にして、段々洩もれ聞いた所を寄せ集めて見ますと、心配をしていた、一方のみだらな噂などはこれっぱかりもない代りには、もう一つの気むずかし屋の方は、どうして一通りでないことが分つて来たのでございます。いわば変人とても申すのでござ

いましょう。お友達なども少く、多くは内の中に引込み勝ちで、それに一番いけないのは、女ぎらいという噂すらあつたのでございます。それも、遊びのおつき合いをなさらぬための、そんな噂なら別条はないのですけれど、本当の女ぎらいらしく、私との縁談にしましてからが、元々親御さん達のお考えで、仲人に立つた方は、私の方よりは、却て先方かえつの御本人を説きふせるのに骨が折れたほどだと申すのでございます。尤もそんなハッキリした噂を聞いた訳ではなく、誰かが一寸口をすべらせたのから、私が、お嫁入りの前の娘の敏感でひとりがつてん都合点ちよつとをしていたのかも知れません。いいえ、いざお嫁入りをして、あんな目にあいますまでは、本当に私の都合点に過ぎないのだと、しいてもそんな風に、こち

らに都合のよい様に、気休めを考えていたことでございます。これで、いくらか、うぬぼれもあつたのでございますわね。

あの時分の娘々ようした気持を思い出しますと、われながら可愛らしい様ようでございます。一方ではそんな不安を感じながら、でも、隣町の呉服屋ごふくやへ衣裳いしやうの見立に参つたり、それを家うちじゆう中ちゆうの手で裁縫したり、道具類こまごまだとか、細々こまごました手廻りまわの品々を用意したり、その中へ先方からは立派な結納ゆいのうが届く、お友達にはお祝いの言葉やら、羨望せんぼうの言葉やら、誰かにあえばひやかされるのがなれつこになつてしまつて、それが又恥かしいほど嬉うれしくて、家中にみちみちた花はなやかな空気が、十九の娘を、もう有頂天うちようてんにしてしまつたのでございます。

一つは、どの様な変人であろうが、氣むずかし屋さんであろうが、今申す水際立った殿御振ぶりに、私はすっかり魅せられていたのでもございましょう。それに又、そんな性質の方に限つて、情が濃こまやかなのではないか、私なら私一人を守つて、凡すべての愛情という愛情を私一人に注ぎつくして、可愛がつて下さるのではないか、などと、私はまあなんてお人よしに出来ていたのでございましょう。そんな風に思つても見るのでございしました。

初めの間は、遠い先のことの様に、指折数えていた日取りが、夢の間に近まづいて、近づくに従つて、甘い空想がずっと現実的な恐れに代つて、いざ当日、御婚礼の行列が門前に勢揃いをいたします。その行列が又、自慢に申すのではありませんが、十幾いくつり

の私の町にしては飛切り立派なものでしたが、それの中にはさま
つて、車に乗る時の心持というものは、どなたも味わいなさるこ
とでしようけれど、本当にもう、気が遠くなる様でございました
つけ、まるで屠所の羊でございますわね。精神的に恐しいばかり
でなく、もう身内がずきずき痛む様な、それはもう、何と申して
よろしいのやら。……

二

何がどうなつたのですか、兎も角も夢中で御婚礼を済せて、一
日二日は、夜さえ眠つたのやら眠らなかつたのやら、舅姑がどの

様な方なのか、召使達が幾人いるか、挨拶あいさつもし、挨拶あいさつされていながらも、まるで頭に残っていないという有様なのでございます。するともう、里帰り、夫と車を並べて、夫の後うしろすがた姿を眺めながら走っていても、それが夢なのか現なのか、……まあ、私はこんなことばかりおしやべりして、御免下さいまし、肝心の御話がどこかへ行つてしまいますわね。

そうして、御婚礼のごたごたが一段落つきますと、案じるよりは生むが易いと申しますか、門野は噂程の変人というでもなく、却て世間並よりは物柔かで、私などにも、それは優しくしてくれているのでございます。私はほっと安心いたしますと、今までの苦痛に近い緊張が、すっかりほぐれてしまいました、人生というもの

は、こんなにも幸福なものであつたのかしら、なんて思う様になつて参つたのでございます。それに舅姑御二人とも、お嫁入前に母親が心づけてくれましたことなど、まるで無駄に思われたほど、よ好い御方おかたですし、外には、門野は一人子だものですから、こじゅう小舅となどもなく、却て気抜きのする位、御嫁さんなんて気苦労のい入らぬものだと思われたのでございました。

門野の男ぶりは、いいえ、そうじやございませんのよ。これがやっぱり、お話の内なのでございますわ。そうして一しよに暮す様になつて見ますと、遠くから、垣間かいまみ見ていたのと違つて、私にとつては、生れてはじめての、この世にたった一人の方なのですもの、それは当り前でございますでしょうけれど、日が経つにつれて、

段々立たちまきさつて見え、その水際立つた男ぶりが、類たぐいなきものに思われ初はじめたのでございます。いいえ、お顔が綺麗だとか、そんなことばかりではありません。恋なんて何と不思議なものでございましょう、門野の世間並をはずれた所が、変人というほどではなくても、何とやら憂鬱ゆううつで、しよつちゆう一途いちずに物を思いつづけている様な、しんねりむつりとした、それで、縹きりよう緻ちはと申せば、今という透き通る様な美男子なのでございますよ、それがもう、いうにいわれぬ魅力となつて、十九の小娘を、さんざんに責めさいなんだのでございます。

ほんとうに世界が一変したのでございます。二た親のもとで育てられていた十九年を現実世界にたとえますなら、御婚礼の後ののち、

それが不幸にもたった半年ばかりの間ではありましたが、その間はまるで夢の世界か、お伽ときばなし 噺の世界に住んでいる気持ちでございました。大げさに申しますれば、浦島太郎うらしまたろうが乙姫様おとひめさまの御寵愛ごちようあいを受けたという龍りゆうぐう 宮世界、あれでございますわ、今から考えますと、その時分の私は、本当に浦島太郎の様に幸福だったのでございますわ。世間では、お嫁入りはつらいものとなつていきますのに、私のはまるで正反対ですわね。いいえ、そう申すよりは、そのつらい所まで行かぬ内に、あの恐ろしい破綻はたんが参つたという方が当たっているのかも知れませんけれど。

その半年の間を、どの様にして暮しましたことや、ただもうたのし 楽たのしかったと申す外に、こまごましたことなど忘れても居りますし、

それに、このお話には大して関係のないことですから、おのろけめいた思出話は止しにいたしましょうけれど、門野が私を可愛がってくれましたことは、それはもう、世間のどの様な女房思いの御亭主でも、とても真似まねも出来ないほどでございました。無論私は、それをただただ有難いことに思つて、いわば陶醉してしまつて、何の疑いを抱く余裕もなかつたのでございますが、この門野が私を可愛がり過ぎたということには、あとになつて考えますと、実に恐しい意味があつたのでございます。といつて、何も可愛がり過ぎたのが破綻の元だと申す訳ではありません、あの人は、真心をこめて、私を可愛がろうと努力していたに過ぎないのでございます。それが決して、だましてやろうという様な心持ではな

ったのですから、あの人が努力すればするほど、私はそれを真まに受けて、真しんから手頼たよつて行く、身も心も投げ出してすがりついて行く、という訳でございました。ではなぜ、あの人がそんな努力をしましたか、尤もこれらのことは、ずっとずっと後あとになつて、やっと気づいたのではありますけれど、それには、実に恐ろしい理由があつたのでございます。

三

「変だな」と気がついたのは、御婚礼から丁度半年ほどたった時分でございます。今から思えば、あの時、門野の力が、私を可

を眺める愛撫のまなざしの奥には、もう一つの冷い目が、遠くの方を凝視しているのをございます。愛の言葉を囁ささやいてくれます、あの人の声音こわねすら、何とやらうつろで、機械仕掛の声の様にも思われるのをございます。でも、まさか、その愛情が最初から総すべて偽りであったなどは、当時の私には思いも及ばぬことでした。これはきつと、あの人の愛が私から離れて、どこかの人に移りはじめたしるしではあるまいか、そんな風に疑うたぐつて見るのが、やつとだったのをございます。

疑いというものの癖くせとして、一度そうしてきざしが現れますと、丁度夕立雲が広がる時の様な、恐しい早さでもって、相手の一挙一動、どんな微細な点までも、それが私の心一杯に、深い深い疑

惑の雲となつて、群むらがり立つのでございます。あの時の御言葉の裏にはきつとこういう意味を含んでいたに相違ない。いつやらの御不在は、あれは一体どこへいらしたのであらう。こんなこともあつた、あんなこともあつたと、疑い出しますと際限がなく、よく申す、足の下の地面が、突然なくなつて、そこへ大きな真暗な空洞が開けて、はて知れぬ地獄へ吸い込まれて行く感じなのでございます。

ところが、それほどの疑惑にも拘かわらず、私は何一つ、疑い以上の、ハッキリしたものを掴つかむことは出来ないののでございました。門野うちが家をあげると申しましても、極わく僅ずの間で、それが大抵たいていは行先ゆきさきが知れているのですし、日記帳だとか手紙類、写真まで

も、こつそり調べて見ましても、あの人の心持を確め得る様な跡は、少しも見つかりはしないのでございます。ひよつとしたら、娘心のあさはかにも、根もないことを疑つて、無駄な苦勞を求めているのではないかしら、幾度か、そんな風に反省して見ましても、一度根を張つた疑惑は、どう解こうすべもなく、ともすれば、私の存在をさえ忘れ果てた形で、ぼんやりと一つ所を見つめて、物思いに耽ふけつているあの人の姿を見るにつけ、やっぱり何かあるに相違ない、きつときつと、それに極きまっている。では、もしや、あれではないのかしら。といいますのは、門野は先から申します様に、非常に憂鬱なたちだものですから、自然引込ひっこみ思案で、一ま間にとじ籠こもつて本を読んでいる様な時間が多く、それも、書齋で

は気が散っていけないと申し、裏に建っていました土蔵の二階へ上^{あが}つて、幸いそこに先祖から伝わった古い書物が沢^{たくさん}山積んでありましたので、薄暗い所で、夜などは昔ながらの雪洞^{ぼんぼり}をともし、一人ぼっちで書^{しよけん}見をするのが、あの人の、もつと若い時分からの、一つの楽^{たのし}みになっていたのでございます。それが、私が参つてから半年ばかりというものは、忘れた様に、土蔵のそばへ足ぶみもしなくなっていたのが、ついその頃になって、又しても繁^{しげしげ}々と土蔵へ入る様になって参つたのでございます。この事柄に何か意味がありはしないか。私はふとそこへ気がついたのでございまして。

四

土蔵の二階で書見をするというのは少し風変わりと申せ、別段とがむべきことでもなく、何の怪しい訳もない、と一応はそう思うのですけれど、又考え直せば、私としましては、出来るだけ気を配って、門野の一挙一動を監視もし、あの人の持物なども検しらべましたのに、何の変った所もなく、それで、一方ではあの抜けがらの愛情、うつろの目、そして時には私の存在をすら忘れたかと思える物思いでございました。もう蔵の二階を疑いでもする外には、何のてだても残っていないのでございます。それに妙なのは、あの人が蔵へ行きますのが、極って夜更けなこと、時には隣に

寝ています私の寝息を窺うかがう様にして、こつそりと床とこの中を抜け出
 して、御小用おこようにでもいらつしつたのかと思つていますと、そのま
 ま長い間帰つていらつしやらない。縁側えんがわに出て見れば、土蔵の
 窓から、ぼんやりとあかりがついているのでございます。何とな
 く凄しい様な、いうにいわれない感じに打たれることが屢々しばしばな
 でございます。土蔵だけは、お嫁入りの当時、一巡ひとまわり中を見せ
 て貰もらいましたのと時候の変わり目に一二度入つたばかりで、たとえ、
 そこへ門野がとじ籠かごつていまして、まさか、蔵の中に私をうと
 うとしくする原因がひそんでいようとも考えられませんので、別
 段、あとをつけて見たこともなく、従つて蔵の二階だけが、これ
 まで、私の監視のがを脱のがれていたののでございますが、それをすら、今

は疑いの目を以て見なければならなくなったのでございます。^{もつ}

お嫁入りをしましたのが春の半^{なかば}、夫に疑いを抱き始めましたのがその秋の丁度名月時分でございました。今でも不思議に覚えていますのは、門野が縁側に向うむきに蹲^{うづくま}つて、青白い月光に洗われながら、長い間じつと物思いに耽つていた、あのうしろ姿、それを見て、どういう訳か、妙に胸を打たれましたのが、あの疑惑のきっかけになったのでございます。それから、やがてその疑いが深まって行き、遂には、あさましくも、門野のあとをつけて、土蔵の中へ入るまでになったのが、その秋の終りのことでございます。

何というはかない縁^{えにし}でありましょう。あの様にも私を有頂天に

させた、夫の深い愛情が（先にも申す通り、それは決して本当の愛情ではなかったのですけれど）たった半年の間にさめてしまつて、私は今度は玉手箱をあけた浦島太郎の様に、生れて初めての陶酔境から、ハツと眼覚めると、そこには恐しい疑惑と嫉妬しつとの、無限地獄むげんが口を開いて待つていたのでございます。

でも最初は、土蔵の中が怪しいなどとハツキリ考えていた訳ではなく、疑惑に責められるまま、たった一人の時の夫の姿を垣間見て、出来るならば迷いを晴らしたい、どうかそこに私を安心させる様なものがあつてくれます様にと祈りながら、一方ではその様な泥坊じみた行いが恐しく、といつて一度思い立ったことを、今更中止するのは、どうにも心残りなままに、ある晩のこと、あわせ裕

一枚ではもう肌寒い位で、この頃まで庭に鳴きしきっていました、秋の虫共も、いつか声をひそめ、それに丁度闇夜で、庭下駄にわげたで土蔵への道々、空をながめますと、星は綺麗でしたけれど、それが非常に遠く感じられ、不思議と物淋ものさびしい晩のことでありましたが、私はとうとう、土蔵へ忍びこんで、その二階にいる筈の夫の隙見すきみを企てたのでございます。

もう母屋おもやでは、御両親をはじめ召使達も、とつくに床についておりました。田舎町いなかの広い屋敷のことでございますから、まだ十時頃というのに、しんと静まり返って、蔵まで参りますのに、真つ暗なしげみを通るのが、こわい様でございました。その道が又、御天気でもじめじめした様な地面で、しげみの中には、大きな蝦が

墓^まが住んでいて、グルルル……グルルル……といやな鳴き声さえ立てるのでございましょう。それをやつと辛^{しんぼう}抱して、蔵の中へたどりついて、そこも同じ様に真つ暗で、樟^{しょう}脳^{のう}のほのかな薫^{かお}りに混つて、冷い、かび臭い蔵特有の一種の匂いが、ゾーツと身を包むのでございます。もし心の中に嫉妬の火が燃えていなくなつたら、十九の小娘に、どうまああの様な真似が出来ましょう。本当に恋ほど恐いものはございませんわね。

闇の中を手探りで、二階への階段まで近づき、そつと上を覗いて見ますと、暗いのも道理、梯子段^{はしごだん}を上つた所の落し戸が、ピツタリ締^{しま}つているのでございます。私は息を殺して、一段一段と音のせぬ様に注意しながら、やつとこのことで梯子の上まで昇り、

ソツと落し戸を押し試みて見ましたが、門野の用心深いことには、上から締りをして、開かぬ様になつてゐるではございませんか。

ただ御本を読むのなら、何も錠まで卸おろさなくても、そんな一寸したことまでが、氣懸きがりの種になるのでございます。

どうしようかしら。ここを叩たたいて開けて頂こうかしら。いやい

や、この夜更けに、そんなことをしたなら、はしたない心の内を見すかさね、猶な更疎おさらうとんじられはしないかしら。でも、この様な、

蛇の生殺しの様な状態が、いつまでも続くのだったら、とても私には耐えられない。一そ思い切つて、ここを開けて頂いて、母屋から離れた蔵の中を幸いに、今夜こそ、日頃の疑いを夫の前にさらけ出して、あの人の本当の心持を聞いて見ようかしら。などと、

とつおいつ思い惑つて、落し戸の下に佇たたずんでいました時、丁度その時、実に恐ろしいことが起こつたのでございます。

五

その晩、どうして私が蔵の中へなど参つたのでございましょう。夜更けに蔵の二階で、何事のある筈もないことは、常識で考えても分りそうなものなのに、ほんとうに馬鹿馬鹿しい様な、疑ぎ心暗鬼しんあんきから、ついそこへ参つたというのは、理窟りくつでは説明の出来ない、何かの感応があつたのでございましょうか。俗にいう虫の知らせでもあつたのでございましょうか。この世には、時々常

識では判断のつかない様な、意外なことが起るものでございます。その時、私は蔵の二階から、ひそひそ話ばなしの声を、それも男女二人の話はなしを、洩れ聞いたのでございました。男の声はいうまでもなく門野のでしたが、相手の女は一体全体何者でございましたか。

まさかまさかと思っていました、私の疑いが、余りに明かな事実となって現れたのを見ますと、世慣れぬ小娘の私は、ただもうハツとして、腹立たしいよりは恐ろしく、恐ろしさと、身も世もあらぬ悲しさに、ワツと泣き出したいのを、僅にくいしめて、瘡おこりの様に身を戦おのかせながら、でも、そんなでいて、やっぱり上の話声に聞き耳を立てないではいられなかったのでございます。

「この様なおう瀬を続けていては、あたし、あなたの奥様にすみませんわね」

ほそぼそ

細々とした女の声は、それが余りに低いために、殆ど聞き取れぬほどでありましたが、聞えぬ所は想像で補つて、やっと意味を取ることが出来たのでございます。声の調子で察しますと、女は私よりは三つ四つ年かさで、しかし私の様にこんな太つちようではなく、ほつそりとした、丁度泉鏡花さんの小説に出て来る様な、夢の様に美しい方に違いないのでございます。

「私もそれを思わぬではないが」と、門野の声がいうのでございます。――「いつもいつて聞かせる通り私はもう出来るだけのことをして、あの京きょうこ子を愛しようとするだけ、悲しいことには、

それがやっぱり駄目だめなのだ。若い時から馴染なじみを重ねたお前のご
が、どう思い返しても、思い返しても、私にはあきらめ兼ねるの
だ。京子にはお詫わびのしようもないほど済まぬことだけれど、済ま
ない済まないと思いつながら、やっぱり、私はこうして、夜毎にお
前の顔を見ないではいられぬのだ。どうか私の切ない心の内を察
しておくれ」

門野の声ははつきりと、妙にきりこうじよう切口上きりこうじように、せりふめいて、私
の心に食い入る様に響いて来るのでございます。

「嬉しうございます。あなたの様な美しい方に、あの御立派な奥
様をさし置いて、それほど思つて頂くとは、私はまあ、何とい
う果報者かほうものでしょう。嬉しうございますわ」

そして、極度に鋭敏になった私の耳は、女が門野の膝ひざにでももたれたらしい気勢けはいを感じるのをごさいます。………

………
 まあ御想像なすつても下さいませ。私のその時の心持がどの様
 にごさいましたか。もし今の年でしたら、何の構うことがあるも
 のですか、いきなり、戸を叩き破つてでも、二人のそばへ駈込
 んで、恨みつらみのありたけを、並べもしたでしょうけれど、何を
 申すにも、まだ小娘の当時では、とてもその様な勇氣が出るもの
 ではございません。込み上げて来る悲しさを、袂たもとの端で、じつと
 押えて、おろおろと、その場を立去りも得えせず、死ぬる思いを続
 けたことをごさいます。

やがて、ハツと気がつきますと、ハタハタと、板いたの間まを歩く音がして、誰かが落し戸の方へ近づいて参るのでございます。今ここで顔を合わせては、私にしましても、又先方にしましても、あんまり恥かしいことですから、私は急いで梯子段を下おりると、蔵の外へ出て、その辺の暗闇へ、そつと身をひそめ、一つには、そうして女奴めの顔をよく見覚えてやりましよう、恨みに燃える目を見はったのでございます。ガタガタと、落し戸を開く音がして、パツと明りがさし、雪洞を片手に、それでも足音を忍ばせて下りて来ましたのは、まごう方かたなき私の夫、そのあとに続く奴めと、いきまいて待てど暮せど、もうあの人は、蔵の大戸をガラガラと締めて、私の隠れている前を通り過ぎ、庭下駄の音が遠ざかって

いったのに、女は下りて来る氣勢もないのでございます。

蔵のことゆえ一方口で、窓はあつても、皆金網で張りつめてありますので、外ほかに出口はない筈。それが、こんなに待つても、戸の開く氣勢も見えぬのは、余りといえば不思議なことでございます。第一、門野が、そんな大切な女を一人あとに残して、立去る訳もあります。これはもしや、長い間の企たくらみで、蔵のどこかに、秘密な抜け穴でも拵こしらえてあるのではなからうか。そう思えば、真つ暗な穴の中を、恋に狂つた女が、男にあいたさ一心で、怖わさも忘れ、ゴソゴソと匍はつている景色が幻の様に目に浮かび、その幽かすかな物音さえも聞える様で、私は俄に、そんな闇の中に一人こでいるのが怖こわくなつたのでございます。また夫が私のいないの

を不審に思つてはと、それも気がかりなものですから、兎も角も、その晩は、それだけで、母屋の方へ引返す^{ひきかえ}ことにいたしました。

六

それ以来、私は幾度闇夜の蔵へ忍んで参つたことでもございまいやう。そして、そこで、夫達の様々の睦^{むつごと}言^{こと}を立聞きしては、どの様に、身も世もあらぬ思いをいたしたことでございまいやう。その度^{たびごと}毎に、どうかして相手の女を見てやりましよう、色々に苦心をしたのですけれど、いつも最初の晩の通り、蔵から出て来るのは夫の門野だけで、女の姿などはチラリとも見えはしない

のでございます。ある時はマッチを用意して行きまして、夫が立去るのを見すまし、ソツと蔵の二階へ上あがつて、マッチの光でその辺を探し廻ったこともありましたが、どこへ隠れる暇いとまもないのに、女の姿はもう影もささぬのでございます。またある時は、夫の隙を窺つて、昼間、蔵の中へ忍び込み、隅から隅を覗き廻つて、もしや抜け道でもありはしないか、又ひよつとして、窓の金網でも破れてはしないかと、様々に検べて見たのですけれど、蔵の中には、鼠ねずみ一匹逃げ出す隙間も見当たらずなのでございました。

何という不思議でございましょう。それを確かめますと、私ももう、悲しさ口惜くやしさよりも、いうにいわれぬ不気味さに、思わずゾツとしないではいられませんでした。そうしてその翌晩になれ

ば、どこから忍んで参るのか、やっぱり、いつもの艶めかしい囁
き声が、夫との睦言を繰返し、又幽霊の様に、いずことも知れ
ず消え去つてしまうのでございます。もしや何かの生霊が、
門野に魅入つていてのではないでしょうか。生来憂鬱で、どこと
なく普通の人と違つた所のある、蛇を思わせる様な門野には（そ
れ故に又、私はあれほども、あの人に魅せられていたのかも知れ
ません）そうした、生霊という様な、異形（いぎよう）のものが、魅入り易
いではありませんすまいか。などと考えますと、はては、門野自身
が、何かこう魔性（ましよう）のものにさえ見え出して、何とも形容の出来
ない、変な気持になつて参るのでございます。一（いっ）そのこと、里へ
帰つて、一伍（いちぶ）一什（いっし）を話そうか、それとも、門野の親御さま達に、

このことをお知らせしようか、私は余りの怖わさ不気味さに幾度かそれを決心しかけたのですけれど、でも、まるで雲を掴む様な、怪談めいた事柄を、うかつにいい出しては頭から笑われそうで、却て恥をかく様なことがあつてはならぬと、娘心にもヤツと堪えて、一日二日と、その決心を延ばしていたのでございます。考えて見ますと、その時分から、私は随分きかん坊でもあつたのでございますわね。

そして、ある晩のことでございました。私はふと妙なことに気づいたのでございます。それは、蔵の二階で、門野達のいつものおう瀬が済みまして、門野がいぎ二階を下りるといふ時に、パタンと軽く、何かの蓋のしまる音がして、それから、カチカチと錠

前でも卸すらしい氣勢がしたのでございます。よく考えて見れば、この物音は、ごく幽かではありましたが、いつの晩にも必ず聞いた様に思われるのでございます。蔵の二階でそのような音を立てるものは、そこに幾つも並んでいます。蔵持ながもちの外ほかにはありません。さては相手の女は長持の中に隠れているのではないかしら。生きた人間なれば、食事も摂とらなければならず、第一、息苦しい長持の中に、そんな長い間忍んでいられよう道理はない筈ですけれど、なぜか、私には、それがもう間違いのない事実の様に思われて来るのでございます。

そこへ気がつきますと、もうじつとしてはいられません。どうかして、長持の鍵を盗み出して、長持の蓋をあけて、相手の女奴

を見てやらないでは気が済まぬのでございます。なあに、いざとなつたら、くいついででも、ひつ搔いてでも、あんな女に負けるものか、もうその女が長持の中に隠れているときまりでもした様に、私は齒ぎしりを嚙んで、夜のあけるのを待ったものでございませぬ。

その翌日、門野の手文庫から鍵を盗み出すことは、案外易々やすやすと成功いたしました。その時分には、私はもうまるで夢中ではありましたが、それでも、十九の小娘にしましては、身に余る大仕事でございました。それまでも、眠られぬ夜が続き、さぞかし顔色も青ざめ、身体からだも痩せ細やつていたことでありましよう。幸い御両親とは離れた部屋に起きお伏ふししていたしましたのと、夫の門野

は、あの人自身のことで夢中になっていましたのことで、その半月ばかりの間を、怪しまれもせず過ごすことが出来たのでございませ。さて、鍵を持って、昼間でも薄暗い、冷たい土の匂いのする、土蔵の中へ忍び込んだ時の気持、それがまあ、どんなでございませしたか。よくまああの様な真似が出来たものだど、今思えば、一そ不思議な気もするのでございます。

ところが鍵を盗み出す前でしたか、それとも蔵の二階へ上りながらでありましたか、千々に乱れる心の中で、わたしはふと滑稽なことを考えたものでございます。どうでもよいことではありませけれど、ついでに申上げて置きましょうか。それは、先日からのあの話声は、もしや門野が独で、声色を使っていたのではな

いかという疑いでございました。まるで落し話の様な想像ではありませんが、例えば小説を書きますためとか、お芝居を演じますためとかに、人に聞えない蔵の二階で、そつとせりふのやり取りを稽古けいこしていらしたのではあるまいか、そして、長持の中には女などではなくて、ひよつとしたら、芝居の衣裳でも隠してあるのではないか、という途方もない疑いでございました。ほほほほほ、私はもうのぼせ上っていたのでございますわね。意識が混乱して、ふとその様な、我身に都合のよい妄想が、浮かび上るほど、それほど私の頭は乱れ切っていたのでございます。なぜと申して、あの睦言の意味を考えましても、その様な馬鹿馬鹿しい声色を使う人が、どこの世界にあるものでございますか。

七

門野家は町でも知られた旧家だものですから、蔵の二階には、先祖以来の様々の古めかしい品々が、まるで骨董屋こつとうやの店先のように並んでいるのでございます。三方の壁には今申す丹塗にぬりの長持が、ズラリと並び、一方の隅には、昔風の縦に長い本箱が、五つ六つ、その上には、本箱に入り切らぬ黄表紙、青表紙が、虫の食った背中を見せて、ほこりまみれに積み重ねてあります。棚の上には、古びた軸物の箱だとか、大きな紋のついた両掛け、葛籠つづらの類、古めかしい陶器類、それらに混って、異様に目を惹ひきますの

は、鉄漿おはぐろの道具だという、巨大なお碗わんの様な塗物ぬりもの、塗り盥だらひ、
 それには皆、年数がたつて赤くなつてはいますけれど、一々きんも金
 紋もんが蒔絵まきえになつているのでございます。それから一番不気味な
 のは、階段あがを上つたすぐの所に、まるで生きた人間の様に鎧よろいび
 櫃つの上に腰かけている、二つの飾り具足ぐそく、一つは黒糸緘くろいとおどしの
 いかめしいので、もう一つはあれが緋緘ひおどしと申すのでしうか、
 黒ずんで、所々糸が切れてはいましたけれど、それが昔は、火の
 様に燃えて、さぞかし立派なものだったのでございませう。兜かぶと
 もちやんと頂いて、それに鼻から下を覆う、あの恐ろしい鉄の面
 までも揃つているのでございます。昼でも薄暗い蔵の中で、それ
 をじつと見ていますと、今にも籠手こて、脛すねあて当あてが動き出して、丁度

頭の上に懸けてある、大身おおみの槍やりを取るかとも思われ、いきなりキヤツと叫んで、逃げ出したい気持ちさえいたすのでございます。

小さな窓から、金網を越して、淡い秋の光がさしてはいますけれど、その窓があまりに小さいため、蔵の中は、隅の方になると、夜の様に暗く、そこに蒔絵だとか、金具だとかいうものだけが、魑魅魍魎ちみもうりようの目の様に、怪しく、鈍く、光っているのでございませす。その中で、あの生霊の妄想を思い出しでもしようものなら、女の身で、どうまあ辛抱が出来ましょう。その怖わさ恐ろしさを、やつと堪こらえて、兎も角も、長持を開くことが出来たのは、やつぱり、恋という曲くせもの者の強い力でございましょうね。

まさかそんなことがと思いなから、でも何となく薄気味悪くて、

一つ一つ長持の蓋を開く時には、からだ中から冷いものがにじみ出し、ハツと息も止まる思いでございました。ところが、その蓋を上げて、まるで棺桶かんおけの中でも覗く気で、思い切つて、グツと首を入れて見ますと、予期していましたが通り、或は予期あるいに反して、どれもこれも古めかしい衣類だとか、夜具、美しい文庫類などが入っているばかりで、何の疑わしいものも出ては来ないのでございます。でも、あの極つた様に聞えて来た、蓋のしまる音、錠前のおりる音は、一体何を意味するのでありましょう。おかしい、おかしいと思ひながら、ふと目にとまったのは、最後に開いた長持の中に、幾つかの白木の箱がつみ重なつていて、その表に、床ゆかしいお家流で「お雛様ひなさま」だとか「五人囃子ばやし」だとか「三人上じ

戸^{ようご}「だとか、書き記^{しる}してある、雛人形の箱でございしました。私は、どこにも怪しいものがないことを確めて、いくらか安心していたのでもありましょう、その際ながら、女らしい好奇心から、ふとそれらの箱を開けて見る気になりました。

一つ一つ外に取り出して、これがお雛様、これが左近^{さこん}の桜、右^う近^{こん}の橘^{たちばな}と、見て行くに従って、そこに、樟腦の匂いと一緒に、何とも古めかしく、物懐しい気持が漂って、昔物のきめの濃^{こま}やかな人形の肌が、いつとなく、私を夢の国へ誘って行くのでございしました。私はそうして、暫くの間は、雛人形で夢中になつていました。だが、やがてふと気がつきますと、長持の一方の側^{がわ}に、外^{ほか}のとは違つて、三尺以上もある様な長方形の白木の箱が、さも貴重品と

いった感じで、置かれてあるのでございます。その表には、同じくお家流で「はいりよう拝領」と記されてあります。何であろうと、そつと取り出して、それを開いて中の物を一目見ますと、ハツと何かの気に打たれて、私は思わず顔をそむけたのでございます。そして、その瞬間に靈感というのは、ああした場合を申すのでございます。数日來の疑いが、もう、すっかり解けてしまったのでございます。

八

それほど私を驚かせたものが、ただ一個の人形に過ぎなかった

と申せば、あなたはきつと「なあんだ」とお笑いなさるかも知れません。ですが、それは、あなたが、まだ本当の人形というもの、昔の人形師の名人が精根を尽くして、拵え上げた芸術品を、御存知ないからでございます。あなたはもしかや、博物館の片隅なぞで、ふと古めかしい人形に出あって、その余りの生々なまなましさに、何とも知れぬ戦慄せんりつをお感じなすつたことはないでしょうか。それが若し女児人形おなごや稚児人形ちごであつた時には、その持つ、この世ほかの外の夢の様な魅力に、びっくりなすつたことはないでしょうか。あなたは御みやげ人形といわれるものの、不思議な凄味すこみを御存知でいらつしやいませうか。或は又、往昔衆道おうせきしゆうどうの盛んでございました時分、好き者達が、馴染の色若衆の似顔人形を刻ま

せて、日夜愛撫したという、あの奇態な事実を御存知でいらつしやいませうか。いいえ、その様な遠いことを申さずとも、例え**ば**、ぶんらく文楽のじようり浄瑠璃人形にまつわる不思議な伝説、近代の名人安本亀八の生人形いきなぞを御承知でございましたなら、私がその時、ただ一個の人形を見て、あの様に驚いた心持を、十分御察し下さることが出来ると存じます。

私が長持の中で見つけました人形は後のちになつて、門野のお父さまに、そつと御尋ねして知つたのでございますが、殿様から拝領の品とかで、あんせい安政の頃の名人形師立木と申す人の作と申すことでございます。俗に京人形と呼ばれておりますけれど、実はうきよ浮世人形とやらいうものなそうで、身みの丈たけ三尺余り、十歳ばかりの小

児の大ききで、手足も完全に出来、頭には昔風の島田しまだを結ゆい、昔染の大柄友染ゆうぜんが着せてあるのでございます。これも後に伺ったのですけれど、それが立木という人形師の作風なのだそうで、そんな昔の出来にも拘らず、その女兒人形は、不思議と近代的な顔をしているのでございます。真ッ赤に充血して何かを求めている様な、厚味のある唇くちびる、唇の両脇で二段になつた豊ほう頬きょう、物いいたげに。パツチリ開いた二重ふたえまぶた瞼、その上に大おお様ように頬笑ほほえんでいる濃まゆい眉、そして何よりも不思議なのは、羽二重はぶたえで紅べに綿わたを包んだ様に、ほんのりと色づいている、微妙な耳の魅力でございました。その花はなやかな、情慾的な顔が、時代のために幾分色があせて、唇の外ほかは妙に青あかざめ、手垢てあかがついたものか、滑なめらかな肌なめらがヌメヌメと

汗ばんで、それゆえに、一層悩ましく、なまめ艶かしく見えるのでございます。

薄暗く、樟脳臭い、土蔵の中で、その人形を見ました時には、ふつくと恰好よくふくらんだ乳のあたりが、呼吸をして、今にも唇がほころびそうで、その余りの生々しさに私はハツと身震みふるいを感じたほどでありました。

まあ何ということでございますよう、私の夫は、命のない、冷たい人形を恋していたのでございます。この人形の不思議な魅力を見ましては、もう、その外に謎の解き様はありません。人嫌いな夫の性質、蔵の中の睦言、長持の蓋のしまる音、姿を見せぬ相手の女、色々の点を考え合せて、その女と申すのは、実はこの人

形であつたと解釈する外はないのでございます。

これは後になつて、二三の方から伺つたことを、寄せ集めて、想像しているのでございますが、門野は生れながらに夢見勝ちな、不思議な性癖を持っていて、人間の女を恋する前に、ふとしたことから、長持の中の人形を発見して、その持つ強い魅力に魂を奪われてしまったのでございましょう。あの人は、ずっと最初から、蔵の中で本なぞ読んではいかなかったのでございます。ある方から伺いますと、人間が人形とか仏像とかに恋したためしは、昔から決して少くはないと申します。不幸にも私の夫がそうした男で、更に不幸なことには、その夫の家に偶然稀代きだいの名作人形が保存されていたのでございます。

人でなしの恋、この世の外の恋ほかでございませす。その様な恋をす
るものは、一方では、生きた人間では味わうことの出来ない、悪
夢の様な、或は又お伽噺の様な、不思議な歓楽に魂をしびらせな
がら、しかし又一方では、絶え間なき罪の苛責かしゃくに責められて、
どうかしてその地獄を逃れたいと、あせりもがくのでございませす。
門野が、私を娶めとつたのも、無我夢中に私を愛しようと努めたのも、
皆そのはかない苦悶くもんの跡に過ぎぬのではございませんか。そう思
えば、あの睦言の「京子に濟まぬ云々うんぬん」という、言葉の意味も
解けて来るのでございませす。夫が人形のために女の声色を使つて
いたことも、疑う余地はありません。ああ、私は、何という月日
の下もとに生れた女でございませす。

九

さて、私の懺悔ざんげ話と申しますのは、実はこれからあとの、恐ろしい出来事についてでございます。長々とつまらないおしやべりをしました上に「まだ続きがあるのか」と、さぞうんざりなさいましょうが、いいえ、御心配には及びません。その要点と申しますのは、ほんの僅かな時間で、すっかりお話出来ることなのでございますから。

びっくりなすつてはいけません。その恐ろしい出来事と申しますのは、実はこの私が人殺しの罪を犯したお話でございます。そ

の様な大罪人が、どうして処罰をも受けないで安穩あんのんに暮しているか
 と申しますと、その人殺しは私自身直接に手を下した訳でなく、
 いわば間接の罪なものですから、たとえあの時私がすべてを
 自白していても、罪を受けるほどのことはなかつたのでござ
 います。とはいえ、法律上の罪はなくとも、私は明かにあの人を
 死に導いた下手人げしゆにんでございます。それを、娘心のあさはかにも、
 一時の恐れにとりのぼせて、つい白状しないで過とがごしましたこと
 は、返す返すも申もうしわけ訳なく、それ以来ずっと今日こんにち日まで、私は
 一夜としてやすらかに眠ったことはありません。今こうして懺悔
 話をいたしますのも、亡き夫への、せめてもの罪つみほろ亡なぼしでござ
 います。

しかし、その当時の私は、恋に目がくらんでいたのでございませう。私の恋こいがたき敵たきが、相手もあろうに生きた人間ではなくて、いかに名作とはいえ、冷い一個の人形だと分りますと、そんな無む生しょうの泥人形に見返られたかと、もう口惜しくて口惜しくて、口惜しいよりは畜生道ちくしょうどうの夫の心が浅間あさましく、もしこの様な人形がなかったなら、こんなことにもなるまいと、はては立木という人形師さえうらめしく思われるのでございます。エエ、ままよこの人形奴めの、艶かしい這しやつたら面めんを、叩きのめし、手足を引ちぎつてしまったなら、門野とてまさか相手のない恋も出来はすまい。そう思うと、もう一ときも猶予ゆうよがならず、その晩、念のために、もう一度夫と人形とのおう瀬を確めた上、翌早朝、蔵の二階へ駈

上つて、とうとう人形を滅茶滅茶めっちゃめっちゃに引ちぎり目も鼻も口も分らぬ様に叩きつぶしてしまつたのでございます。こうして置いて、夫のそぶりを注意すれば、まさかそんな筈はないのですけれど私の想像が間違つていたかどうかも分る訳なのでございます。

そうして丁度人間の轢死れきし人の様に、人形の首、胴、手足とばらばらになつて、昨日に変わる醜いむくろをさらしているのを見ますと、私はやつと胸をさすることが出来たのでございます。

十

その夜、何も知らぬ門野は、又しても私の寐息ねいきを窺いながら、

雪洞をつけて、縁外えんそとの闇へと消えました。申すまでもなく人形とのおう瀬を急ぐのでございます。私は眠ったふりをしながら、そつとその後姿を見送つて、一応は小気味のよい様な、しかし又何となく悲しい様な、不思議な感情を味わつたことでございます。人形の死骸を発見した時、あの人はどの様な態度を示すでしよう。異常な恋の恥かしさに、そつと人形のむくろを取り片づけて、そ知らぬふりをしているか、それとも、下手人を探し出して、怒りつけるか、怒りいかのまま叩かれようと、怒鳴どなられようと、もしそつであつたなら、私はどんなに嬉しかろう。門野が怒おこるからには、あの人は人形と恋なぞしていなかつたしるしなのですもの。私はもう気もそぞろに、じつと耳をすまして、土蔵の中の氣勢を窺つ

たのでございます。

そうして、どれほど待ったことでしょうか。待っても待っても、夫は帰って来ないのでございます。壊れた人形を見た上は、蔵の中に何の用事もない筈のあの人が、もういつもほどの時間もたつたのになぜ帰って来ないのでしよう。もしかしたら、相手はやっぱり人形ではなくて、生きた人間だったのでありませんか。それを思うと気が気でなく、私はもう辛抱がしきれなくて、床から起き上りますと、もう一つの雪洞を用意して、闇のしげみを蔵の方へと走るのぞきましました。

蔵の梯子段を駈上りながら、見れば例の落し戸は、いつになく開いたまま、それでも上には雪洞がともっていると見え、赤茶け

た光りが、階段の下までも、ぼんやり照しております。ある予感にハツと胸を躍おどらせて、一飛びに階上へ飛上つて、「旦那様」と叫びながら、雪洞のあかりにすかして見ますと、ああ私の不吉な予感は適中したのでございました。そこには夫のと、人形のと、二つのむくろが折り重なって、板いたの間は血潮ちしおの海、二人のそばに家重代いえじゆうだいの名刀が、血を啜すすつてころがつているのでございます。人間と土くれとの情死、それが滑稽に見えるどころか、何とも知れぬ厳げんしゆく肅なものが、サーツと私の胸を引しめて、声も出さず涙も出さず、ただもう茫然ぼうぜんと、そこに立ちつくす外はないのでございました。

見れば、私に叩きひしがれて、半残なかばった人形の唇から、さも人

形自身が血を吐いたかの様に、血潮の飛沫が一しづく、その首を
抱いた夫の腕の上へタラリと垂れて、そして人形は、断末魔だんまつまの
不気味な笑いを笑っているのをごさいました。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻」春陽堂

1926（大正15）年9月26日発行

初出：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年10月1日

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

※「怒」に対するルビの「おこ」と「いか」の混在は底本通りです。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：まつもっ

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人でなしの恋

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>